第２分科会　書くことⅠ

ことばを蓄え、ことばを生かす国語教室の創造

～書くことにおける学習目標の明確化と言語活動の工夫を通して～

１　研究のねらい

本地区の生徒は、俳句や短歌などの創作には積極的に取り組むものの、「書く事柄や組立てを考えて書く」など論理的な文章を書くことが苦手であること、語彙力が不足していることなどが課題として挙げられた。そこで、本研究会では、「論理的に書く」とは、「相手や目的を明確にして伝えたい事実を筋道立ててわかりやすく書くこと」と考え、生徒自身が「書く」ことにおける基礎的・基本的事項を身に付け、興味をもってかつ主体的に活動に取り組めるような授業を創造したいと考えた。

２　研究の内容（実施２年）

（１）　授業づくりの視点

①　単元を貫く言語活動の位置づけ及びその言語活動と単位時間の活動（学習目標）との関連性を明確にすることで、生徒に学習の見通しをもたせるとともに学びの必要性を理解させる。

②　学習用語や言語事項を習得させることで、「書くこと」の基礎的・基本的な知識・技能の向上を図る。

③　②で習得した知識や技能を活用する言語活動の過程において文章モデル（型）を示すことで、論理的な文章の書き方を身に付けさせる。

（２）　授業の実際

①　単元を貫く言語活動の位置づけ及び学習目標の明確化【資料１・２】

単元を貫く言語活動の位置づけにおいて必要なことは、その活動を通して生徒に身に付けさせたい力を整理することである。そこで、学習指導要領の指導事項と合わせて生徒の実態に応じた指導のねらいを設定し、適切な言語活動の位置づけを図った。以下に示すのは、第２学年「説明のしかたを工夫しよう」（光村図書）における単元を貫く言語活動の位置づけである。

【単元で身に付けさせたい力】学習指導要領より
○　自分が伝えたい内容を明確にして、文章の構成を工夫すること。
○　事実や事柄などが相手に効果的に伝わるように説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと。

【生徒の実態】事前アンケートより
○　約６割の生徒が文章構成や情報整理がうまくできないことを理由に「書くこと」に対して、苦手意識をもっている。
○　一方で、苦手な理由として挙げている内容を「書く」ときには意識している生徒も目立つ。

・　相手や目的などの条件が明確な言語活動を設定し、書く内容（事実や意見）を焦点化させる。
・　相手に効果的に（わかりやすく）伝えるために必要な知識・技能の習得をさせる。

【単元を貫く言語活動】
来年度入学する三松小学校の６年生に中学校の魅力を説明しよう。

さらに、単元を貫く言語活動を行うにあたり、単位時間の学習がその言語活動とどのようにつながっていくのかといった見通しをもたせ、学びの意味を実感させることが大切だと考えた。そこで、単元の導入段階で単元を通した学習活動を提示し、今後の学習の流れ（学習目標）が生徒にもわかるようにした。このことは、生徒が単元の始まりから、単元を貫く言語活動全体の目的と見通しをもつことができ、主体的に学習に取り組む手立てとして有効だったと考える。

② 言語活動を工夫した授業づくり

ア 学習用語の習得【資料３】

円滑な言語活動は、学習用語や言語事項として知識の習得の上に成り立つものであると考える。このときの学習用語とは、教科内容であり習得しておくと後の学習に継続的・累積的に役立つ用語を意味する。本研究会では、これらを整理・集約し、板書掲示用として作成したものを共通して授業で使用している。そこで、前述の単元ではＩＣＴを活用しながらの四つの説明のしかたについて解説し、黒板にはその中から取り出した学習用語として習得させたいものを提示した。また、振り返りの場面や次時の既習事項を確認する際にも活用し、基礎的・基本的事項の確実な定着を図った。

イ 学びの活用【資料４】

学習したことを生かす実践的な活動を取り入れ、生徒自身の活用力が高まるようにした。その一つとして取り組んだ（比較して説明する方法を取り上げた場合の）説明する事柄の特徴を書き出す活動では、「比較」「共通点」「相違点」「観点」といった学習用語を意識させながらダブルイメージマップを作成させ、生徒自ら比較する観点を洗い出させた。この活動は、書くための情報収集の手立てとなるものであるが、意識すべき学習用語の理解が深まっていることで必要な情報を効率よく取り出すことができた。さらに、生徒の単元終了後の感想にも学習用語が多く用いられており、一定の学習効果があったと考える。

ウ 文章モデル（型）の提示【資料５】

語彙力を高めるための実践として、順序を表す際に必要な言葉や対比する際に用いる言葉について確認するとともに、それらの言葉をワークシートに提示し、文章を書く際に意識させるようにした。すると、直接原稿用紙に書かせた時と比較して、モデル（型）があることで「書くこと」を苦手としている生徒でも、書き出しや構成法にほとんど戸惑うことなく活動に取り組むことができ、論理的な記述のしかたの学び及び実践につながっていた。また、「書くこと」が得意な生徒の文章からは、モデル（型）を意識しつつも独自の表現を追求し、試行錯誤した跡が伺え意欲の高まりを感じることができた。さらに、全体としては小学生相手に説明するということで難解語句が使用できないことから、よりわかりやすい表現を吟味しながら文章を書く様子が見られた。これは、「書くこと」の基本となる相手意識の表れから生じたものであり、相手に応じて表現のしかたを変えるという技能を生かす実践の場ともなった。

エ 技能向上を目指した取組【資料１・資料６】

単元の終末では、互いに書いた文章を評価し、表現の工夫や課題点を書き出させることで文章を見直す時の視点に気付かせ、自己の文章力向上につながるようにした。その後、説明のしかたが変わると使用する言葉にも変化が生じることを理解させるために、「説明のパラグラフの構成」を用いながら根拠を挙げて説明する文章を同じテーマで再構成させた。

３ 研究の成果と今後の課題

（１）研究の成果

① 「単元を貫く言語活動」の位置づけの際に、教師側が指導事項（ねらい）をしっかりと整理し焦点を絞ったため、生徒に対して明確な目的を示すとともに、見通しをもって活動に取り組ませることができた。

② 学習用語を用いることで、自分達が学習している内容（蓄積されるべき知識）を意識して授業に臨ませることができた。

③ 文章のモデル（型）に、構成を表す学習用語や説明に用いる語彙を提示することで、文章の順序や記述のしかたについて確認させることが可能となり、論理的な文章を書く手立ての習得につなげることができた。【資料７】

（２）今後の課題

① 教師側が生徒の変容を明確に把握し、それに応じて書く力を向上させる手立てを講じていく必要がある。

② 学習用語の習得だけにとどまることがないように、今後もそれを活用する言語活動の位置づけや内容の工夫が必要である。

③ 「書くこと」の単元では、個人差が生じやすいため、指導計画を十分に練る必要がある。

《参考文献》

○ 北俊夫著『言語活動は授業をどう変えるか一考え方の実践とヒントー』文溪堂

○ 鶴田清司　河野順子編著『論理的思考力・表現力を育てる　言語活動のデザイン　中学校編』　明治図書

○ 文部科学省『中学校学習指導要領解説　国語編』

○ 花田修一　小森茂　水戸部修治　成田信子共同編著『実践国語研究』（２０１５）明治図書